

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 10 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23720108

研究課題名（和文）

中世前期言説史上における『古事談』の基礎的研究

研究課題名（英文）A Study of a Literary Position of Kojidan in the Medieval Period.

研究代表者

蔦尾 和宏 (TSUTAO KAZUHIRO)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：50510765

研究成果の概要（和文）：説話集『古事談』の構成を皇位継承・歌徳の二視点から分析し、一条天皇と後三条天皇をつなぐ半世紀の説話群が後三条天皇を見据えて構成されていることを明らかにするとともに、『古事談』が歌徳説話の有する政治性を嫌い、これを否定する立場から和歌説話を編纂するという文学的特質を有することを明らかにすると同時に、しかしながら、和歌という表現形式そのものを嫌ったのではないことを論証した。

研究成果の概要（英文）：We have attempted to analyze a collection of tales with its title of Kojidan (Narrative Stories of the Medieval Period) from the two viewpoints of the accession of imperial throne, and of Katoku, the enchantment of the Japanese Classical poems. We have made clear that the collection of the stories, lasting half a century from the Emperor Ichijo to that of Gosanjo, have been composed keeping in view the Emperor of Gosanjo. What has been proved is that Kojidan was repelled by the political inclination inherent in Katoku, and offered an alternative of the traditional tales of a literary style; and yet at the same time that it has not denied the style of the traditional Japanese poems.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：古事談・説話集・歌徳・皇位継承・和歌説話・歴史認識

1. 研究開始当初の背景

説話集『古事談』（源頭兼編・1210年代前半成立）は先行文献の抄出を編纂の基本とし、かつ、後代の説話作品群の典拠として頻繁に引用されているため、前代と後代をつなぐ仲介的作品と位置付けることができ、或る言説史を概観する定点として利用しやすい作品である。そのため、多くの文学研究者に資料として利用されてきたが、資料としての利用は多くとも、作品全体を俯瞰する研究は極めて少ないものであった（遺憾ながら、この状況は本研究が終了した現時点においても基

本的に変わらない）。その大きな要因として、作品を理解する前提となる注釈書が不備であり、考察の基礎的前提すら築かれていなかったことが挙げられる。しかし、本作品が2005年に新日本古典文学大系の一冊として精緻な注を付して刊行されることで、研究を進める条件が整備されることとなったが、文学史上に本作品を位置づける研究は緒に付いたばかりであるため、『古事談』の文学的研究の基礎作業として、作品成立当時の時代状況に照らして、皇位継承と歌徳の二つを基軸に本研究を立案した次第である。

2. 研究の目的

(1) 12世紀後半から13世紀前半は皇位継承をめぐる混乱がしばしば生じた。近衛天皇が後嗣を残さず若年で死去し、その後継をめぐる争いは、称徳天皇以来の女帝の可能性が模索され、最終的に後白河天皇の即位で決着を見たが、それに起因した保元の乱は皇位継承問題に初めて武力で解決された一件だった。さらに源平の争乱では、平家が三種の神器を帯して安徳天皇とともに都落ちをし、天皇不在の京では神器を欠いたまま後鳥羽天皇が即位、加えて、三種の神器のうち、宝剣は平家とともに海底に沈み、遂に捜索し得ずに終わった。この時期を生きた貴族たちが皇位継承に関わる様々な言説に関心を寄せたり、自ら史的に過去の皇位継承を展望したりする著作を残すのは、如上の現実と無縁ではなく、『古事談』も同様もまた、説話配列から推すに皇位継承の来歴に深い関心を抱いていたと想像されるのである。

現在、『古事談』は文学的ジャンルで言えば説話集に分類されるが、前近代ではむしろ史書的な故実書とされていたようで、東山御文庫では史書に分類・所蔵されている由なのは、その一証に挙げられる。『古事談』は巻一を「王道后宮」と銘打ち、天皇関係説話を集成し、その配列はほぼ忠実な時代順である。一方、他の巻の配列が必ずしも時代順ではないことを踏まえるならば、巻一は或る種の史書、より具体的に言えば、天皇の年代記、「皇代紀」を構想していたと捉えることが可能である。さらに言えば、巻一は歴代天皇を順に並べたのではなく、特定の天皇が時代を追って取り上げられる、選択的な年代記だった。これは、特定の史観のもとに一卷は構成されたことを示唆していよう。採録された天皇の偏りとその挿話の分析を通じ、『古事談』の史観を明らかにし、巻一を一個の「皇代紀」として捉えたとき、『古事談』がいかなる皇統史を構想したのか、それを検討する。

特に、巻一卷頭話は女帝・称徳天皇にまつわる説話を配するが、これは近衛天皇の後継に女帝の可能性が浮上した、『古事談』成立に近時の歴史と深く関わるものと考えられ、かつ、ほぼ同時代に成立した史書『水鏡』『愚管抄』も称徳女帝に相応の分量を割くため、『古事談』内部の論理の考究に留まらず、これら三書の背景としての時代思潮にも考察を広げていきたい。

(2) 「歌徳」とは簡単に言えば、和歌の持つ超越的な力である。勅撰和歌集の始発である『古今集和歌』において、既に仮名序が、「力をも入れずして天地を動かし…男女の仲をもやはらげ、たけき武士の心をも慰むるは和歌なり」と和歌の超越的な力を具体的に列挙している。だが、これは『古今和歌集』の信

仰告白であり、歌徳とは仮構された観念に過ぎない。なかんずく、詠歌を通じた廷臣の訴えに耳を傾け、それを聞き入れる王という典型的な歌徳説話は極めて政治的に演出された幻想だった。『古事談』の成立期周辺には、歌徳意識の高揚が見られることが先行研究に指摘されるが、それは相応の事情あつてのことだった。いわゆる源平の争乱が終息した京では、約三十年ぶりに勅撰集撰進が命じられ、『千載和歌集』が成立、続く『新古今和歌集』は後鳥羽院の親撰とも言うべきもので、後鳥羽は歌徳を解する王たる演出をするに申し分のない存在だったためである。

このような時代の趨勢を背景に成立した『古事談』だが、同時代の散文作品に比して所収の和歌説話が少ない(管見では14話/460話)ため、単純な数量的見地から判断すれば、和歌に関心を向けられない作品とされる。編者・顕兼の経歴をつぶさに追ひ、歌人としての挫折経験が和歌説話の少なさの背景であることが既に指摘されているが、具体的な所収説話の分析がなされていないため、先行研究の成果である「挫折した歌人」と、歌徳が盛行する時代状況という、相反する二側面から所収説話の分析を試み、最終的に『古事談』における和歌説話編纂の基軸に「反歌徳」が存したことを証明したいと考える。

(3) 上記二点を中心に研究を進めるが、見通しの如く研究が進捗しない可能性を考慮し、予備的研究として下記の問題も設定しておく。狂言綺語観とは仏教の妄語の見地から、飾った言葉で虚構を構える文学を罪悪視する思想であるが、『古事談』成立時周辺では、この狂言綺語観が肥大化を見せる時代でもある。『源氏物語』の作者・紫式部が『源氏物語』という虚言を弄したため、死後に地獄に落ちたという言説の成立・流布はその一端である。その紫式部の供養を「歌詠みども」が行った(『宝物集』巻五)とは、墮地獄説話に最も関心を寄せたのが歌人たちだったことを窺わせる。十三世紀半ばになると、和歌は本朝の言葉で詠まれた陀羅尼であり、仏の言葉と等しいという和歌即陀羅尼観が一般化し、文学活動における狂言綺語観との抵触はひとまず解決される。だが、当該期の歌人・文人はいまだ少なからず、狂言綺語観と文学活動の整合性の問題を抱えていたのだが、『古事談』は所収する和歌説話自体、少ないのだが、その少ない説話は僧侶の事績を集成した「僧行」にもっとも多く見られる。すなわち、和歌から最も遠いはずのところに最も量が多いという、一見、矛盾する現象が生じており、『古事談』成立時の狂言綺語観と本作品の相関を、文学史上の問題として考察する。

3. 研究の方法

(1) 卷一「王道后宮」の研究方法について

① 卷一卷頭話の研究

『古事談』卷一「王道后宮」巻頭話は、称徳天皇が道鏡の奉った淫具によって死亡するという衝撃的な内容である。その内容の過激さゆえに、『古事談』が暴露趣味の作品である一証としてしばしば挙げられる説話であるが、作品が寄せた関心は話柄の淫靡さではなく、女帝が必然的に有する問題点（非皇族が夫になった時、その皇婿の処遇と皇位の帰趨）にあったと考えられる。本研究では巻頭話の構成（複数の説話の組み合わせ方）から、如上の問題意識を『古事談』が有していた証明を試みる。さらに、「女帝の問題点」だけでは、「皇代紀」の巻頭話に置かれる理由を十全に説明したとは言い難いため、なぜ本話が「皇代紀」の巻頭話たり得るのかを併せて考察する。

② 「埋もれた時代」の考察

『古事談』巻一には一条天皇（在位：986～1011）・後三条天皇（同 1068～72）・白河天皇（同 1072～86）という三人の天皇をめぐる大きな説話群が存在する。一条朝は天皇の外戚が政治の主導権を握る、いわゆる摂関政治の時代であり、後三条朝は摂関が外戚の地位を失って、その権威を低下させ、天皇が政治を主導した時代であり、『古事談』巻一はその対照を描いたとする先行研究が、凡そ受け入れられるところとなっている。本研究の着眼点は、一条朝と後三条朝で大きな政治体制の転換が見られたと『古事談』が認識するならば、両朝の隙間を埋める三条・後一条・後朱雀・後冷泉の四代（1011～68）という、言わば「埋もれた時代」をどのように扱ったのかということである（この四代にも相応数の説話が採録されている）。天皇は地味だが、この背後には約 50 年にわたり、摂関にあった藤原頼通という大物の廷臣がいた。四代の説話には頼通が少なからず姿を見せており、頼通との関係から過渡期たる「埋もれた時代」を見る史観を考察する。頼通は後三条の即位を最後まで渋った人物であり、「埋もれた時代」に底流する主題がやはり皇位継承であったことを論証したい。

(2) 歌徳説話をめぐる研究方法について

① 作品論的方法—出典関係からの考察—

『古事談』は出典未詳の説話が少なくないが、中には「出典作品→古事談→引用作品」という引用関係を明確にたどれる説話も存在する。『古事談』の和歌説話には「昇進に漏れて立腹し、辞任した前官の貴族（藤原伊通）が詠歌によって昇進するという典型的な歌徳説話が存在するが、当該話は「今鏡→古事

談→十訓抄」という経路で引用されたことが確認できる。よって、三書の比較から、『古事談』の説話の立ち位置を考察する。

② 作品論的方法—巻末話の和歌から—

『古事談』は六巻から成るが、巻五・巻六巻末は和歌説話で終わる。韻文であれ、散文であれ、編纂物の巻頭・巻末は特別な意識を以て配列がなされるのが常である。よって、和歌によって幕を閉じる散文作品を博搜し、和歌が巻末に採用される場合、いかなる機能を和歌に担わせているのか、その傾向を探り、『古事談』の巻末和歌説話との対比を行うことで、『古事談』の和歌説話に対する姿勢を明らかにしていく。

③ 作品論的方法—僧行の和歌から—

研究目的(3)との関わりから、巻三「僧行」に見る行基の辞世歌、一条天皇の辞世歌という二つの辞世歌を特に取り上げる。この一条天皇の辞世歌は『新古今集』に入集したもので、『古事談』成立期において最もよく知られた一条天皇詠であったが、その一方、編者・顕兼は『新古今集』に一首も採られずに終わったこととの関係から、当該歌を所収する他文献との比較を通じ、これをどのような和歌として作品中に定位しようとしたのかを検討する。また、行基の辞世歌を高僧の詠歌の歴史中においてその立ち位置を確認するとともに、『古事談』が新たに与えた文学的意味を考察する。

④ 歌徳説話の文学史的研究

1. に「今鏡→古事談→十訓抄」という引用関係の相互比較から、『古事談』の和歌説話の性格を明らかにすると述べたが、同時に歌徳に対する『今鏡』『十訓抄』の姿勢をも検討の対象とする。現在では『古事談』『十訓抄』が説話集、『今鏡』が歴史物語と分類されるが、中世では『古事談』は史書の性格を備えた故実書、『十訓抄』が教訓書、『今鏡』が史書という捉えられ方をしてきたようである。三者三様と思しい、歌徳に対する姿勢の相違を如上の書物としての性格の相違という観点から考察を加える。

4. 研究成果

研究目的に掲げた(1)②、(2)①～④については、概ね達成できた。得られた成果は下記の如くである。

(1)

既に述べたところだが、『古事談』巻一「王道后宮」は、一条・後三条・白河の三天皇に大きな説話群を形成するが、一条朝は摂関の影響過多の時代、後三条朝が摂関の影響を排した王の自立の時代であることが既に先行研究に指摘されている。摂関家との外戚関係

の欠如により、即位すら危ぶまれた後三条に『古事談』は強い関心を寄せ、一大説話群を形成したのだが、即位が危ぶまれた時期とは彼が東宮としてあった後冷泉朝に他ならない。本研究は後三条朝説話群との相関を視座に、巻一における「埋もれた時代」後冷泉朝説話群（一・五一～五五）の位置付けを考察した結果、御遊にあって藤原教通のみが「衆人」とは異なり、正式な装束をしていたという一・五二において、『古事談』は出典の『今鏡』が不明とする年時をあえて後冷泉朝に設定したが、同様の例が一・六五にも認められ、後冷泉朝と後三条朝を対照的に描こうとする作為であることを論証し、両朝の対照という点に留意すれば、これが後三条朝説話群における一つの説話の語られ方であるのが明らかになる。後冷泉朝説話群には教通の他、藤原頼通・源俊房・源隆国の三人の廷臣の逸話が採られるが、彼らは後冷泉を関白として支える頼通とその腹心で、かつ、東宮・後三条に疎遠という点で共通する人々だった。一方、教通は摂関職を巡る対立から後冷泉朝は頼通とは距離を置いていた。頼通への距離は、後冷泉を支える頼通とは疎遠であった東宮・後三条への支持へと容易に転じ得ると見通されるが、白河朝説話群の冒頭話にその見たての正しさは証明されている。一・五二が後冷泉朝に時代設定されたのは、後冷泉朝において、頼通が率いる「衆人」と、それとは一線を画す教通という対照を象徴的に示す意図に発していたと考えられる。さらに、頼通・俊房・隆国は後三条朝説話群にも登場し、後冷泉朝とは反転した話柄が語られる。このように『古事談』は後三条朝を見据えて後冷泉朝説話群を選択・配列した。すなわち、巻一における後冷泉朝説話群とは後三条朝説話群の伏線に他ならなかったと結論付けられるのである。

(2)

説話集における巻頭話、或いは巻末話は、いわばその作品や巻の顔であり、そこに配される話柄は特別な意味を有するが、『古事談』は巻五、巻六の巻末話に和歌説話を配し、特に巻六巻末話は作品全体の掉尾でもある。文学史に照らして、巻末に置かれる和歌は予祝という歌の徳により、寿ぎを以て作品を閉じる機能を果たすのが一般的傾向でありながら、『古事談』はあえて大団円を迎えさせないかたちで和歌を配するのである。

臣節所収の藤原伊通の籠居説話は『今鏡』『古事談』『十訓抄』に同文的同話が認められるが、和歌を中心に説話構成を分析すると、和歌の内容を正確に理解して歌徳説話を構成する『今鏡』、劇的な歌徳説話の成立を優先させて和歌を曲解する『十訓抄』に対して、『古事談』のみ和歌の内容を無化する説話構

成をとるとの結論が得られ、これは歌徳を意図的に成立させない編纂手法を『古事談』が採っていると考えざるを得ない。

僧行における一条院の詠歌説話では、死の床の院が愛妃を思う心情を込めた歌を詠んでいる。同歌を収める他文献では出家時の詠歌とされるものが、『古事談』では辞世の歌とされている。すなわち、死に臨んでなお、愛妃に出着する院の姿を描くのだが、これは仏教でいう愛執の罪業に相当し、院の来世は暗いものとなるのが予感される。シニカルな筆致が特徴的な『古事談』であるから、そのような結末が展開されると思いきや、『古事談』はそれによって一条院が往生できなかつたとは描かず、往生人として扱うのである。死を目前に愛する人を思うという、仏教的には妄執ではあるが、人として至当の情を吐露する手段として使われた和歌に対する、『古事談』の眼差しは決して冷たいものではなかつたのである。このような一連の検討より導かれるのは、『古事談』は和歌という表現形式そのものを嫌ったのではなく、和歌が有するとされた歌徳の政治性を嫌ったということである。これは編者・顕兼が後鳥羽院歌壇における落伍者であり、和歌を通じた政治的立身に失敗した経歴と決して無縁ではなからう。

本研究が明らかにした歌徳に対する『古事談』の姿勢は、他の文献には殆ど見られない、極めて特殊なものであり、それが編者の経歴という、極めて個人的な理由に起因するものであるにせよ、同時代の和歌的言説を考察する新たな視点を提出し得たものと思われる。

但し、歌徳を視座とした研究については、如上の明確な結論を得たものの、問題が大部に及ぶため、成稿に難渋した結果、本報告書執筆時点では、遺憾ながら掲載学術誌が決定していないが、最終的には審査の付いた学術誌への掲載を目指すものである。

また、(3)に挙げた内容に踏み込めなかつたは、予備的研究という位置付けとは言え、忸怩たるものがあり、今回の研究で得られた成果をもとに、もっと具体的な研究の端緒を探っていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 葛尾和宏、伏線としての後冷泉朝—『古事談』巻一「王道后宮」小論一、国語と国文学、査読有、第89巻第8号、2012、pp. 36—51。

6. 研究組織

- (1) 研究代表者

葛尾 和宏 (TSUTAO KAZUHIRO)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：5051076